

PURE 5

Manami & Yusei

風

fuu

termity



エタニティ文庫

C o n t e n t s

P U R E 5 5

特別番外編

しあわせの実感 297

PURE 5

1 新しい年の朝に

薄暗い中、目を覚ました早瀬川愛美は、数分布団の中でもごもごしたあと、まず片足を布団の外に出してみた。今朝はまた、かなり冷え込んでいるようだ。

彼女はゆっくり身体から布団を剥がし、起き上がった。寒いけれど心は弾んでいた。

お正月なのだ。優誠さんと、初日の出を見に行ける……

喜びが膨れ上がり、愛美は微笑んだ。

不破優誠は彼女の婚約者だ。愛美が危険に晒されていると知り、急遽アメリカから帰ってきてくれた彼は、いま彼女の家で寝泊りしている。

愛美は、足の傷のところ感触してみた。少し引きつるような感覚はあるものの、もう痛みはない。

包帯の上からふくらはぎを数回撫でたあと、彼女は着替えを取り出した。

急いで着替えないと、身体が冷え切ってしまう。持っている中で一番厚手のコーデューロイのパンツを穿き、シャツも厚地のものを選んだ。それに自分で編んだクリーム色の

セーターを重ねる。

あとはコートを羽織ってゆけば、寒さを充分防げるだろう。

最後に全身をチェックした愛美は、首を傾げた。

いまはこれでいいけど……日の出を見て、戻ってからはどうしよう？

元旦くらい、少し改まった服を着たいけど……スカートを穿くと、包帯が見えてしまう。

昨日、包帯を目にするたびに、優誠さん、顔を曇らせてたし……

やはり、パンツを穿いたほうがいいだろうか？

愛美は顔をしかめた。

それに、明日も……

明日は父の実家である蔵元の家に行くことになっている。包帯を巻いているのを見たら、誰だって気になるだろう。きっと、どうしたのかと聞かれるに違いない。

彼女が死にかけたなんて話は、できれば隠しておきたいのだが。けど、着てゆけそうな服は、ワンピースやスカートばかり。パンツスーツなど、持っていないし……

愛美は思案しつつ部屋を出た。まっすぐ洗面所に向かう。

まずはコンタクトをつけなきゃならない。ほんやりした視界では不便だ。

居間の前を通り過ぎようとしていた愛美は、話し声を耳にし、足を止めた。

この声……不破と父のようだ。

一番に起きたつもりでいたのに、すでにふたりとも起きていたらしい。苦笑していた愛美は、もうひとり別の声を聞き取り、思わず瞬きした。

この声は、上島さん……

そうだった、上島がいたのだ。すっかり忘れていた……

ということとは？ わたしが一番最後に起きたってこと？

愛美は自分を笑いながら、その場を離れた。

上島は、不破家の執事をしている人物だ。いや、していたというべきだろうか？

彼は愛美のことを庇つたために、不破の父の不興を買ってしまい、失職してしまったのだ。それがなんと昨日のこと。

底冷えする寒さに、厚手の靴下を履いていても、爪先がジンジンする。

こんな時間、親友の桂崎百代はまだ、布団の中で丸くなって寝ているに違いない。その様を思い浮かべて愛美は微笑んだ。別荘で年を越している、もうひとりの親友である藤堂蘭子も、百代と同じように寝ているのだろうか……

不破家のクリスマスパーティー以降、ずっとぎくしゃくしていた蘭子とも仲直りができた。

年明け、蘭子と学校で会うのが楽しみでならない。また三人で……

嬉しさを噛み締めた愛美だったが、不破のことを考えて暗い気分になった。

その頃には……不破はまたアメリカに行ってしまったている。

仕事なのだから、仕方のないことだ。

いま、彼はここにいる。せめて、一緒にいられるときを楽しまなくては……

愛美は自分に言い聞かせた。

洗面所でお湯を出し、温んでくるのを待って、顔を洗いコンタクトと格闘した。

コンタクトの着用品が日課になったが、まだ慣れないせいで、装着に手こずることもある。だが、今日は楽勝でつけられた。たったそれだけのことなのだが、年明けに、幸先よさを感じて嬉しくなる。

明るい視界を手に入れた愛美は、にっこり微笑んだ。コンタクトというものは、本当に世界を明るくしてくれる。

愛美は鏡の中の自分に「おめでとう」と言い、居間に足を向けた。

「お嬢様、お早いのですね」

「上島さん」

「あけましておめでとうございます。お嬢様」

台所の前で鉢合わせした上島から丁寧な頭を下げられ、愛美は慌てた。

「あ、あ、あけましておめでとうございます」

言葉を詰まらせながら言った愛美に、上島はさらに深々とお辞儀を返してくる。

正直、お嬢様という呼び名にはクレームをつけたいのだが、やめておいた。彼には彼なりの、心地良いやり方というのがあるのだらうし、あれこれ禁止されると困るに違いない。

「朝食の支度をさせていただこうと思うのですが……。お雑煮などは、やはりご家庭の味がおありでしょうし……」

「あ……そ、そうですね。いえ、いいですよ」

なんと返事をすべきか迷い、しどろもどろになっていると、上島は気落ちした表情になった。それを見て、慌てて言葉を足す。

「あの、上島さんの味付けで構いません」

上島は途端に嬉しげな顔になった。

「それでは、私に任せてくださるのですか？」

「は、はい。よろしくお願いします。あの、でも台所の使い勝手とか、材料とか」

「まだ時間は充分にございますから、これから台所の中を確かめさせていただこうと思います。よろしいでしょうか？」

「よろしいです……あ……上島さんの好きに使ってください」

思わず言葉がへんてこになり、恥ずかしさに愛美は赤くなったが、上島は感激して目

を潤^{うる}ませている。

「お嬢様……ありがとうございます」

「は、はい。あの、それじゃ、あの、よろしくお願いします」

愛美はべこべここと頭を下げ返した。

できればお客様として、滞在してもらったほうが、愛美としてはやりやすいのだが……お客様の立場に甘んずるくらいなら、上島はここを出てゆくと言うに違いない。

「お嬢様、何かご用事などございましたら、なんなりと、この上島に申しつけてくださいませ」

どうやら彼は、何もかも、ひとりでやるつもりらしい。

正直眩暈^{めまい}がした。

「台所、かなり寒いんです。暖房すぐに入れますね」

「暖房は徳治様^{とくじ}が入れてくださいました。それよりお嬢様、優誠様が居間でお待ちでございます。初日の出をご一緒に見にゆかれるとお聞きしました。早くお出かけになりませんと、日が昇ってしまうかもしれません。朝食の用意は、この上島に、安心してお任せくださいませ」

愛美は外に目を向けてみた。確かに、上島の言うとおりだ。

「それじゃ、あの、上島さん、よろしくお願いします」

愛美は急いで口にする、上島を気にしながらも居間に向かった。居間には、不破と父がいた。部屋はすでに充分温まっている。いったい彼らは何時に起きたのだろうか？

「おはようございます」

「おう、愛美、おはよう。新年だな。おめでとう」

「あ、うん。お父さん、あけましておめでとう」

愛美は父に向けて挨拶し、はにかみながら不破を見上げた。

「まな、おはようございます」

「優誠さん、おはよう……ございます」

不破が新年の挨拶をしなかったことに、照れを感じた。昨夜、ふたりきりで新しい年を迎え、新年の挨拶もしてしまっている。そのときの、不破との親密なふれあいを思い出してしまい、愛美は頬を染めた。

「それでは、まな、ゆけますか？」

椅子の上に置いてあったコートを取り上げながら不破が言う。

「あ、はい。コ、コート取ってきます」

愛美は急いでコートを取りに行った。戻ってくると、不破は居間の前で待っていた。それじゃ、ゆきましようか？」

「それじゃ、ゆきましようか？」

愛美は嬉しさを嘯み締め、不破のあとに続いた。

外の空気は刺すような冷たさだった。ふたりの吐く息が白い。

愛美は手を握り合わせ、口元に持つてきて、はっつと息を吐きかけた。

「まな」

不破が手を差し出してきた。手を重ねると、ぎゅつと握り締めてくれる。外気に触れて、すでにどちらの手も冷たかった。それでも触れ合いは、胸に温かい。

不破は自分のコートのポケットに、握り合ったふたりの手を入れた。

心臓が高鳴る。

まるで恋人同士みたい……

思わずそう考えた愛美は、吹き出しそうになって、ぐっと堪えた。

わたしってば……みたいじゃなくて、ちゃんとした恋人同士なのに……

それでも、恋人という言葉はなんとも面映い。

愛美は歩きながら寄り添っている不破を見上げた。彼女を見つめていたらしい不破と目が合い、ふたりは見つめ合った。ポケットに入っている不破の手に、やんわりと力が込められ、胸が甘く膨らむ。目指す場所に着くまで、ふたりは言葉を交わさずに歩き続けた。

愛美が日の出を見るために選んだ場所は、採土場の脇の小道を登ったところだ。道幅が狭いうえにいささか傾斜の強い坂道で、その急勾配を初めて目にした不破は、眉をひそめた。だが、異議を唱えることなく、彼女が楽に登れるように手を貸してくれる。太陽は、ふたりが登りきるまで待つてはくれず、坂道の途中で足を止めて、日の出を眺めることになった。

荘厳という言葉がぴたり当てはまるような景色、そして神々しい光。その光は、心に直接差し込んでくるような気がした。自分の身体が透明になったような不思議な感覚に浸りながら、愛美は不破をそっと見上げた。

尊いものを見るような眼差しで、不破は顔を出したばかりの太陽を見つめている。朝日に照らされている彼の端正な顔を、愛美は息を詰めて見つめた。

不破の青い瞳は、神秘的な色に変わっていた。

愛美の視線に気づいたのか、不破が顔を向けてきた。

「この光景は、言葉にできませんね」

頷いた愛美は、太陽に目を向けたが、すでに高く上がってしまった、もう直視することは難しかった。

「上まで登ってから、帰りますか？」

「ですね。せっかくここまで来たんだし……とつても素敵な眺めなんですよ」
ふたりは、ゆつくりとした歩みで、頂上を目指した。

「確かに素晴らしい眺めだが……まな、ここは少々寒いようですね」

寒さに身を縮こまらせている愛美に、不破は笑いながら言う。

「え、ええ、優誠さん、もう下りましょう」

愛美は急いで提案した。

景色は見事でも、この身を切るような冷たい風には、さすがに耐えられない。

坂を下りようと、不破に背を向けた途端、愛美は後ろから抱きしめられていた。

「ゆ、優誠さん」

「せっかくこんなところまでやってきたのです。そうだな……何か記念になるものが欲しいですね」

耳元で聞こえるその言葉には、特別な甘さが含まれていた。

その声の響きに愛美の身体の本が震える。

「き、記念？」

不破の唇が愛美のうなじに触れた。

冷たく柔らかな唇の感触に、愛美の鼓動は急激に速まってゆく。

愛美の身体を自分のほうに向かせた不破は、互いの両手を繋ぎ、彼女の表情を味わうように見つめながら、ゆっくりと顔を寄せてきた。

唇を触れ合わせ、顔を上げた不破は、満ち足りた笑みを浮かべた。

「まな……こうして、貴方といられる現実……私にとつて、夢のようだ」

不破の顔を見つめていた愛美は、思わず右手を上げて、不破の頬に触れていた。

彼の存在を確かめたかった。夢のようだと言ったが、愛美はこのしあわせな現実が、本当に夢なのではと感じられてならない。まるで夢物語のようで……

「まな」

不破の唇から、愛美の名が零れた。

彼女は不破の頬を両手でそっと挟むと、爪先だつて唇を重ねた。

2 贈り物の配達人

初日の出を見て戻ってきたときには、美味しそうな雑煮ができていた。しかも、それだけでなく、気の利いた和え物なんかも小鉢に盛られている。それらの料理は、どこにあったのか、彼女がこれまで見たことのない、一人用の塗りの盆の上に載せられ、おま

けに綺麗な箸袋に入った箸が添えられていた。愛美は箸袋を驚きの目で見つめた。

「これ？もしかして、上島さんの手作りですか？」

「はい」

上島は、みなと同じ席に座っているのが落ち着かないらしく、居心地悪そうに身動きしながら返事をした。箸袋に墨で書かれた「寿」の文字の見事さに、愛美は見惚れた。

上島さん、す、凄いいひとだ。

「上島の料理の腕は確かですよ。冷めないうちに、いただきますせんか？」

不破の勧めで、みんな箸を手を取った。「いただきます」とめいめい口にし、食べ始める。

「上島さんって、不破の家の執事さんなのでしょう？ 食事の用意も上島さんがなさるんですか？」

「普段は作っておりません。専任のコックが数名おりますので。ですが必要に応じて、手伝うことがございます」

「そうなんですか」

「味付けが、皆様のお気に召すといいのですが」

「うまいですよ」

「徳治様、ありがとうございます」

「徳治でいい。様付けなど必要ない」

「は、はあ。それでは……徳治さんと……よろしいでしょうか？」

「ああ、それでいい」

「はい。それではそう呼ばせていただきます」

愛美はふたりの会話を聞きながら、お雑煮を啜^{すす}った。ダシが効いていてとても美味しい。

「上島さん、とても美味しいです」

「お嬢様、ありがとうございます」

「あの、上島さん。わたしも愛美でいいです。愛美さんとかで……」

「は、はあ……」

ひどく困った様子上島に、彼女は首を傾げた。

父のときには、すぐに承知してくれたのに、なぜ悩むのだ？

「上島は、貴方を愛美さんとは呼べないでしょう」

不破の言葉に愛美は困惑した。

「どうしてですか？」

「上島は、私のことを、様付けで呼んでいます」

「それが？」

「貴方は私の妻となるひとだからです。まあいまは、クビとなっている身ですから……呼び名にこだわる必要はないと私は思います……」

「優誠様」

「上島、好きに呼ばせてもらえばいい」

くすくす笑いながら不破は会話を締めくくり、上品な仕草で雑煮を食べ始めた。

不破は当たり前のことのように言ったが、愛美は落ち着かなかつた。不破家の人々は、やはり愛美とは生きる世界が違うのだ。

「それにしても、見事な器ばかりですね」

食事を終えて片付けを始めた上島が、感服したように言った。彼は父が作った皿に、惚れ惚れと見入っている。

「食器棚に並んでいる器の数々に、目を見張りました。見事な陶器ばかりを、あれほど揃えておいでは……本当に驚きました」

「そ、そうですか？」

「ええ。正直申しまして、器として使うのはもったいないと思いました。床の間に飾れば、さぞ、映えるでしょうに」

上島の言葉に、愛美はどんな顔をしていいやら困った。上島はこれらの陶器を、買収めたものだと思っっているようだ。食器棚には愛美が作った陶器もかなりあるというのに……

当の上島は、器に夢中になりすぎて、徳治や不破が笑いを堪こらえている様子にも気づかないようだ。

「この小鉢、これは、どなたの作でございますか？　なんともまろやかな味わいの器で、不破の屋敷にも、ひと揃そろい欲しいものですが」

上島は、徳治に顔を向けて尋ねた。

「いまの彼は、不破家をクビになったことすら失念しているようだ。」

「上島、言うのを忘れていたが……」

不破から話しかけられ、上島は徳治から不破のほうへ顔を向けた。

「優誠様、なんでございましょう？」

「その小鉢は、愛美が作ったものだ」

徳治が言った。不破を見つめていた上島は、また徳治に顔を戻した。

「は？」

「ずいぶんと怪訝けげんな顔になってしまっている。」

「ご冗談を……」

「いや、そうなんだろう。徳治さんがそうおっしゃるのだから。そうか、これはまなの」
不破は上島の手から小鉢を取り、じっくりと眺め始めた。

「手触りがいい。それに、上島が言ったように、まろやかな味わいがある」

「そ、そうですか。優誠さん、ありがとうございます」

褒められすぎて、照れくさくてならず、愛美ははにかみながらお礼を言った。

「ほ、本当に、愛美様の作なのですか？」

驚きさめやらぬ様子で、上島は叫ぶように言う。

「ああ。徳治さんは陶芸家でいらっしやる。大学の教授でもあられる」

「こ、これは。窯かまの仕事……そういうえば、昨夜そのようなことをおっしゃっておいででした。あのときはなんのことかわからずにおりまして……。な、なんとも、知らぬこととはいえ……ご無礼を」

「褒めてくれたんですから、謝る必要はないでしょう」

「愛美様まで陶芸家でいらしたとは」

「いえ。わたしはまだ、そういうんじゃない」

そのとき、タイヤが砂利じりを踏む音が聞こえた。

「誰かしら？」

「あいつしかいないだろう。……だが、顔を出すのは昼からだろうと思っていたんだが……」

三次さんじのことを言っているのだろう。蔵元三次は、愛美の叔父で、父の腹違いの弟だ。徳治が窓に近づいていくのを見ながら、愛美は三次を迎えようと、玄関に向かった。

上島は、客が来たことを知り、片付けの手を速めたようだ。

玄関の扉に手をかけようとしたところで、不破が「まな」と声をかけてきた。

「はい」

「私の知り合いのようです」

不破の言葉に、愛美はどきりとした。

ま、まさか、不破の両親が？

でも、いまはまだ、アメリカにいらっしやるはずで……

「優誠さん、どなたが？」

「ともかく、どうして来たのか、話を聞いてきましょう」

不破は靴を履き、外に出ていった。

誰が来たのか気になってならなかったが、外に出て、不破の知り合いと顔を合わせる勇氣はなかった。

お盆に皿を載せた上島が姿を見せた。玄関のほうを気にしつつも、そのまま台所に入ったが、またすぐに出てきた。

「愛美様、洗い物は私が片付けますので、そのままに」

早口に言いながら上島は靴を履き、急いで外へと出ていく。

上島の様子に不安が煽られた。

まさか本当に、不破の両親がやってきたんじゃない……ど、どうしよう……

「愛美」

玄関の扉を見つめていた愛美は、父の声に振り返った。

「お父さん、ゆ、優誠さんの……」

「ああ。不破の屋敷のひとらしい。林田というひとだそうだ」

は、林田？ 不破の両親ではなかったのか？

安堵した愛美は、林田という人物についての記憶を探した。

曖昧にしか覚えていないが……不破家で会った婦人が、確か林田という名前だった気がする。

愛美はためらいながらも靴を履き、外に出てみた。大型の車が停まっただけで、不破はやってきた男女ふたりと話をしている。上島も不破の横に並んでいる。

婦人の顔を確認した愛美は、ほっとした。やっぱり、あのひとだ。不破の屋敷で、温かな笑顔で、愛美を迎えてくれたひと。

不破と話していた林田の視線が愛美に向いた。目が合った瞬間、林田は嬉しそうに微笑みかけてきた。不破も、林田の視線を追うように振り返る。

「まな、徳治さん」

いつの間にやら、父も出てきていたらしい。振り向くと、父は彼女の真後ろに立っていた。

「優誠君、外は寒い。中に入ってもらいなさい」

「はい」

不破は頷き、ふたりに、家に入るよう促した。

「それでは、お持ちした品を……」

林田の隣に立っている男のひとが言ったが、不破は首を横に振った。

「いや、それはあとにしましょう」

「ですが、優誠様、この方を早くお帰ししたいのです。今日はお正月ですので、無理を言つて、お願いしたもので……」

林田は不破にそう説明し、男のひとに申し訳なさそうな視線を向けた。

どうやらこの男のひとは、不破家の使用人ではないらしい。

「そうできましたら、ありがたいです」

にこやかな笑みで男のひとが言う。

不破が頷くと、そのひとはすぐに車の後部に回り、トランクを開けた。

上島と林田のふたりもさっと動き、トランクから出した荷物をそれぞれ抱える。

「いったい、なんなのだろう？　かなりの荷物だ。旅行帰りかと思うような、大きなスー

ツケースまである。

荷物を出し終えた男のひとは、皆に向けて頭を下げると、車に乗り込んで早々に敷地から出ていった。

「林田さん、持ちましょう」

不破は林田に手を差し出したが、林田は一步後ろに退いた。

「とんでもございません、優誠様。わたしは大丈夫でございます」

断固とした林田の態度に、不破は仕方なさそうに、ふたりを引き連れて、玄関のほうへ戻ってきた。

愛美は父と玄関に入り、そこで三人を迎えた。

両手に持っていた荷物を、断りを口にしながら上がり口に置いた林田は、愛美と徳治に改まった顔を向け、深々と頭を下げた。

「新年早々、突然にお邪魔致しまして、誠に申し訳ありません。私、不破家でお世話になつております、林田と申します」

「堅苦しい挨拶は必要ない。さあ、上がってください」

林田は愛美に顔を向けた。

「お嬢様、またお会いできて、うれしゅうございます」

そうやって丁寧に頭を下げる。愛美も同じだけ頭を下げた。

「林田さん、いらっしやい。どうぞ、上がってください」

領いたものの、林田は上がろうとせず、先ほど自分が上がり口に置いた荷物を抱え上げると、不破に場所を譲った。どうやら、不破より先には上がれないということらしくった。

「上島さんがこちらにおいでとは、思ってもいませんでした。驚きましたわ」

居間に落ち着いたところで、林田は笑みを浮かべてそう言った。

林田は、上島がクビになったことを、まだ知らないらしい。

「そういえば昨日、貴方は不破の家にいませんでしたね？」

不破の問いに、林田は頷いた。

「はい。三日ほど留守にしておりましたので。出先から直接参ったんですのよ。もう間

に合わないのではないかと、本当に気を揉みました」

「この住所を、誰からお聞きになったんですか？」

「あ、はい。大奥様からのお電話で」

「ああ。祖母から」

不破は納得したように頷く。

彼の祖母はアメリカに住んでいるのだ。不破は仕事でアメリカに行くと、必ず祖母の

家に滞在させてもらっている。

「はい。旦那様から、申し付けまして……」

「父上？」

不破は怪訝な顔をする。もちろん、林田の言葉には、愛美も戸惑った。

ふたりの反応に、林田のほうも困惑したようだ。

「は、はい、そうです。旦那様が、お嬢様に贈り物をしたいとのこと……」

「贈り物？ 本当に父が？」

「は、はい」

林田は、不破の反応に目をぱちくりさせた。嘘偽りを言っているとは思えない表情だ。だが、不破の父が愛美に贈り物なんてありえない。だって、彼女を庇った上島は、昨日、解雇されてしまっているのに……

愛美は眉を寄せている不破と目を合わせ、首を捻った。

3 必要のない恐れ

「紅色のものもよろしいかと思っただけですが……お嬢様には、この薄桃色の着物がお似

合いかと思ひまして……。いかがでしょうか、愛美様？」

「あ、は、はい、とても素敵なお柄です」

居間の床には、林田が持ってきた、不破の父からの贈り物だという着物一式が広げられていた。

着物を着るのに必要な、すべての小物が揃えられているようだ。

素敵なお柄などと、普通に感想を述べたものの、実際は眩暈を覚えていた。

これって……いったい、いくらしたのか……？

愛美は、黙って座っている父を、救いを求めるように見つめたが、父は眉を上げただけで何も言わなかった。

「お嬢様にお似合いなお柄を選ぶのに、そうは時間をかけていられなくて……。すぐに仕立てていただかなくてはならなかったものですから。気に入っていただけなかったらどうしようかと、もうそればかり」

仕立てて……もらったのか、たったの三日で……暮れの忙しい時期に……

「き、気に入りました」

声がうわずった。

「本当でございますか？ ああ、安堵致しました」

林田はほっと胸を撫で下ろし、笑みを浮かべて、広げられた着物に、そっと指で触れた。

「昨日のうちにお届けしたかったのですが、出来上がったのが昨日の夕方……それからすぐに出発とは、さすがにお願いできなくて……」

「林田さん、ひとつ聞きたいのですが」

不破に声をかけられた林田は、さっと彼に向き直り、小さくお辞儀をした。

「はい。優誠様、なんでございましょうか？」

「この贈り物は、本当に父から？」

「さようございますよ」

林田の答えに、不破は眉を寄せ、顎に指を当てて考え込む。

「父から、直接頼まれたんですか？」

「あ……いえ、大奥様から電話をいただきましたまして、旦那様がお嬢様に振袖を贈りたいとのことだから、よろしく頼むと」

「祖母が」

「はい」

その会話で愛美は納得した。やはり、不破の父からのはずはない。これは不破の祖母が、孫と息子の仲直りのきっかけにと、気を回してくれたということなのだろう。

「あの？ 優誠様、何か？」

「ああ、別にたいしたことでは……」

不破は言葉の途中で顔をしかめ、言葉を止めた。

「いや、そうは言えませんね……」

言葉を言い改めた不破は苦笑した。

「いったい、あの、優誠様？」

「父からということ、ありえないのですよ。林田さん」

「はい……？」

「上島は昨日、父から暇を出されたのですよ」

「はあ？」

林田は、しばしぼかんとした顔になったが、やがて眉をひそめた。

「年明け早々、そんな冗談をおっしゃるなんて、優誠様らしくございませんわ」

「それが、冗談ではないんです」

上島は、面目なさそうに言い、視線を落とした。

「だから、いま、私はこの家にお世話になってるのです」

「そんな馬鹿な。どうして上島さんが暇を出されるのです？ なんの手落ちがあったと……」

「上島は、彼女のことについて、父に抗議してくれたのですよ。それで父は激怒し、上島を解雇した」

「そ、そんな……そんな……旦那様が……そんなことをなさるわけが……」

「私もそう思った。だが、現に上島は暇を出され、ここにいる」

「そんな……信じられません。ありえませんか」

林田の困惑は深まるばかりのようだった。

「旦那様は、お嬢様と優誠様のことをすでに許しておいでです。この着物が、それを証明してくれていますわ。そうではございませんこと？」

不破は、林田と目を合わせ、ゆっくり首を横に振った。

「上島の解雇については、腑に落ちないものがあることは確かです。ですが、彼女への贈り物を頼んだあと、上島を解雇するなど……矛盾している」

確かに不破の言うとおりだ。

そう聞いても林田は納得できないようだったが、反論もできなくなり、肩を落としてしまった。

見ている愛美のほうしが申し訳ない気分になってきた。

「わ、わたしは……そんな……」

不破は林田に近づき、その背に手を触れた。

「祖母がよかれと思ってしてくれたことです。この贈り物が誰からであろうと、彼女は喜んでくれます」

「は、はい。そのとおりです」

愛美は急いで同意し、言葉を添えたが、顔を上げた林田の目は、失意のためか涙で潤っていた。

「林田さん。ともかく、愛美様に着ていただいたらどうでしょう」

取り成すような上島の言葉に、林田はこくこくと頷いた。

「は、はい。お嬢様さえよければ……」

涙を拭きながら林田は言った。

「あの、お願いします。ぜひ」

愛美は林田の気を引き立てようとして、思わずそう口にしていた。

林田が嬉しそうな笑みを浮かべてくれ、愛美はほっとした。

「まな、とてもお似合いですよ」

「そ、そうですか？」

愛美は照れつつ答えた。

林田に着付けてもらった着物。着慣れないから、ちょっと窮屈ではあるが、不破も気に入ってくれたようで嬉しかった。本当に素敵な柄だ。上品だけど華やかさもある。髪も手際よく結び上げてくれ、この着物にぴったりの髪飾りまでつけてもらった。

昼食の準備は上島と林田のふたりで引き受けると言われ、愛美は不破と一緒に墓地への小道を歩いているところだった。

愛美たちが家を出る前に、徳治は工房にこもってしまったが、これは毎年のことだ。

父にとっては、神社に初詣に行くようなものなのかもしれない。新しい年を迎え、陶芸の神に感謝と祈りをささげているのではないだろうか？

墓地に着くと、愛美は入り口のところで手を合わせた。墓地全体を見回していた不破も、同じように手を合わせている。

年が明けてここに来ると、新年を迎えたという感覚がより強くなる。

愛美はひとつひとつの墓に、不破とふたり、ゆっくり手を合わせて拜んだ。

祖母の墓を、愛美はじつと見つめた。

彼女の祖父である蔵元徳三の妻だったひと……精神を病み、自ら命を絶ったひと……

徳三は、妻の死はすべて自分のせいだと罪の意識を抱え、いまだ苦しみから抜け出せずにいる。

苦しみが癒され、この墓地に祖父が訪れる日が、いつかやってくるだろうか？

過去を思い、胸が疼いた。

もちろん生まれていなかった愛美に何ができたわけでもない……それでも、それでも……もどかしさが心の中から噴き出してくる。

「まな」

不破の声に微かな震えを感じ取り、愛美は不破と視線を合わせた。

家柄の釣り合わない蔵元家に嫁いだ祖母。愛美は瓜二つと言っているほど祖母に似ている。そして、祖母同様に愛美も、家柄の釣り合わない不破家に嫁ぐことになる。

不破は不安を抱えている。愛美もまた、彼女の祖母のように精神を病んでしまったらと……

実際、愛美は不破家に嫁ぐことにためらいを感じているし、恐れてもいる。だけど……わたしは大丈夫だ。

不破と生きるために与えられる試練ならば、どんなことも受け入れ、必ず乗り越えてゆく。

「わたしは大丈夫です」

「辛い思いをしたり、苦しいときには、どんなことも、私に話してくださいませね？」

「はい」

「必ず」

「はい。必ず」

愛美がそう答えても、不破は不安を拭えないようだ。

もしかすると、愛美の言葉には、彼女自身も気づかない不安が潜んでいるのかもしれない。

れない。不破はそれを感じ取っているのだろうか……？

「私は、全身全霊をかけて、まな、貴方を守る」

「優誠さん、大袈裟です」

愛美は不破の真剣すぎる気持ちと和らげたくて、冗談めかしてそう言った。

「この着物の贈り主が、本当に父なら良かったのに……上島のがなかったら、私はなんの疑いもなく林田さんの言葉を信じたでしょうね」

着物を見つめる不破の、哀しげな眼差し……

愛美は不破の腕に手をかけ、彼の胸に顔を埋めた。

「お父様は、どんな方なんですか？」

小道をゆっくりと並んで歩きながら、愛美は不破に尋ねた。

「厳しいひとであることは確かです。ですが、理不尽なひとではない」

自分の言葉を信じて欲しいというように、不破は彼女の瞳を見つめてくる。

愛美は彼に伝えて領いた。不破は前方に視線を向けて、また口を開いた。

「貴方への仕打ちは、許せることではありません。ですが……公平なひとです」

矛盾したことを言っていると思っただろう、不破は困ったような表情になった。

愛美はそんな不破に向けて微笑み、領いてみせた。

不破の父なのだ。きつと、彼の言うとおりのひとなのだろう。

「ひとを驚かせるのも好きなんですよ。ですから……今回の上島のこと、何か考えがあつてのことなのではないかと……」

不破は口を閉じて考え込み、しばらく歩いたあと「……もしかすると……」と呟いた。「もしかすると……?」

「いえ。これは私の勝手な想像でしかない」

「話してくださいませんか? お聞きしたいです」

「上島は、解雇になどなっていないのかもしれません」

「えっ? どういうことですか?」

「さあ。私にもわかりません。ただ、今回のような抗議をしたくらいのこと、父は上島を解雇しないだろうと……。それだけはないと思っんです」

不破はもどかしげに息を吐いた。

「だが、父は解雇した。とすれば、父にとって、上島を解雇したという事実が、どうしても必要だったのでは……」

「よく……わかりません」

「ええ。当然です。私にもわからない」

不破は肩を竦め、くすくす笑う。

愛美は足元を見つめた。不破は自分の父親を、よく知っている。だが、それは身内に接するときの不破の父で、他人に接するときの父親とは、まったく別なのではないだろうか?

愛美は、不破の知らない、彼の父の別の面を見たということなのでは?

いや、違う……そうではない。

不破は、父親のいくつもの面を知っているはずだ。たった一度しか対面していない愛美が受けた印象など……それこそ不破の父の一面でしかないのだ。

愛美は大学の推薦入試の面接で、初めて会った自分の祖父を思い出した。あのとき、愛美は祖父に激しい恐れを抱いた。それからの彼女は、祖父は怖い人物だという印象を持ち続けた。けれど、あれにはわけがあつたのだ。祖父は、愛美が、自分の亡き妻にそっくりだとは知らなかった。だから愛美を前にして、平常心ではいられなかったのだ。

それゆえ向けられた容赦のない言葉の数々に、愛美は怯え、それ以後、祖父を恐れるようになってしまった。祖父に対して抱いている恐れ……これはすでに必要のない恐れなのだ。

同じように、不破の父に対して抱いているこの恐れも、捨ててしまふべきではないのか?

隣を歩く不破が足を止めたのに気づき、愛美も歩みを止めた。言葉なく見つめられる。

彼の青い瞳に見入っていると、不破は手を上げて愛美のうなじに触れてきた。長い指で後れ毛をやさしく撫でられ、首筋にぞわぞわとした感覚が広がる。

「私がアメリカに戻る前に、ふたりでどこかへ出かけませんか？」

不破の言葉に胸が切なく疼いた。いまはこうして一緒にいられる。けれど、いずれ彼は再びアメリカに行ってしまう。

「いつ……いつアメリカに？」

「学校の休みはいつまでですか？」

「十一日です。十二日が始業式です」

「それなら、十二日に、貴方を学校に送って、それから」

考えていたよりも、ずっと長くいてくれるとわかり、愛美は嬉しくなった。

「それまでは、ずっとここにいてくださるんですか？」

「ずっといても？」

問うような不破の言葉に、愛美はさらに顔を明るく輝かせた。

「もちろんです。上島さんも優誠さんがいたほうが、絶対居心地がいいと思うし」

不破が苦笑した。

「上島は、なるべく早くに、不破の家に戻りたい」

「そ、そうですね」

だがそのためには、不破は自分の父親と会って話をする必要があるだろう。

不破の両親は、いつ日本に戻るのだろうか？

「明日にでも、父に電話をかけて、じっくり話をするつもりです」

愛美の心の問いが聞こえたように不破が答える。彼は顔を曇らせた彼女を見て、安心

させるように微笑んだ。

「新しい年を迎えたのだし、父も少しは頭が冷えたでしょう」

「そうだろうか？ そうだといいのだが……」

「それで、まな。どこに行きたいですか？」

不破は愛美を抱き寄せながら言う。

いろんなことが起きすぎて、今後どうなってゆくのかわからない。

それでも、いま……愛美は不破の腕に包まれている。

「優誠さんが行きたいところなら……」

白いものがふわりと目の前を掠め、愛美は言葉を止めた。

「雪……」

「本当だ」

愛美は不破の胸に抱かれたまま、空から舞い落ちてくる雪を見つめた。

4 しぶしぶの撤退

家に戻ったふたたりを、林田は待ちかねたように迎えた。

「わたしは、一度戻って、また夕方こちらにお邪魔したいと思っておりますが、よろしゅうございますか？」

「それは……まな、構いませんか？」

「あ、はい」

「それでは家まで送りますよう」

林田は、不破の申し出にとんでもないというように、手を振った。

「それには及びません。もう迎えをお願いしてあります」

その言葉どおり、すぐに不破家から迎えがやってきた。運転手は、以前、愛美を駅まで送ってくれたひとだった。愛美は不破と一緒に挨拶した。

「優誠様、大奥様から電話がございました」

「祖母は、なんと行ってきました？」

「それが、旦那様が今夜には日本に戻られるとのことですよ」

運転手の言葉を聞いた愛美は、思わず不破を見上げ、彼と目を合わせた。不破は小さく頷き、また運転手に顔を向けた。

「父だけですか？」

「奥様は、まだしばらく向こうにご滞在されるそうです」

「そうですか」

不破の父が戻ってくる。

愛美は落ち着かない気分になった。

今日は元日だというのに、急遽戻ってくるというのは、息子と会って話すために違くない。昨日、アメリカに戻るように命じられた不破が、それを拒否したから……

不破は眉を寄せて考え込んでいたが、愛美が不安な面持ちで自分を見つめていることに気づくと、安心させるように微笑みかけてきた。

そのあと、運転手は上島としばらく外で話し込んでいたが、その後、林田を連れて帰っていった。

「今年の正月は賑やかだな」

徳治は豪勢すぎるお節をつつきながら、そう言って苦笑した。

愛美は父の言葉に同意しつつ、目の前の料理を再度見回して思わず笑ってしまった。

三次が注文してくれたお節は、彼女がこれまで見たことがないほどの豪華版。さらに上島の手によって作られた料理まで、所狭しと並べられている。

こんなに賑やかな正月を迎えられるなんて想像もしなかった。

父とふたりきりだった去年の正月を思い出し、愛美は胸が切なくなった。

互いにおめでとうと言葉を交わしあっただけけれど、どちらも心から新年を祝う気持ちにはなれていなかった。

母がいない現実を、父も愛美も受け入れることができていなかった。ふたりの心は……満ち足りることがなかった。

美味しそうに料理を食べながら、不破や上島と語らい、愉快そうに笑っている父を見つめ、愛美は目を潤ませた。

こんな日を迎えられるなんて……

きつと誰よりも、母が喜んでくれてるに違いない。

「明日、おふたりが蔵元に出かけている間、私は家に戻って父と話をしてこようと思います」

食事を終えたところで、不破がそう切り出した。

蔵元の家と一緒に生きてきてくれるのではと期待していた愛美は、内心がっかりした。

「そうか。優誠君、負けるなよ」

父の冗談めいた激励に、不破はやわらかく笑いながら「はい」と答えた。

なんだか明日の訪問が、突如重みを増し、胸がつぶれそうになる。

愛美は思わずため息をついていた。

「まな、どうしたのですか？」

「い、いえ。なんでもありません」

愛美は赤くなりながら、手を振った。

不破と離れたくない。離れると不安に取りつかれる。もう逢えないような気がして……

百代に電話してみようか？ いつでも電話してくれればいいと言ってくれたし……

三次は、二時を過ぎた頃にやってきた。

「なかなか抜け出せなくて……」

玄関先で出迎えた愛美の振袖姿を褒めたあと、居間に入って椅子に座り込んだ三次は、新年の挨拶をしてから不服そうに言った。

「無理して来なくて良かったんだ」

「退屈な客の相手なんかしていただくありませんよ。言っておきますが、本来これは兄さんの仕事なんですからね」

徳治の言葉にむっとしたらしく、三次は切り口上で言い返す。

「おかしなことを言うな。そんなものの私の仕事じゃない」

切り捨てるように言った兄を、三次は睨みつけた。

「あ、あの」

おずおずと声をかけてきたのは上島だった。台所にいたはずだが、客が来たのに気づいて顔を出したのだらう。上島の姿を目にして、三次は眉を上げた。

「上島さんですよ。不破家の……」

三次は上島がなぜここにいるのか疑問に思っただらうが、それ以上に、上島は、三次がやってきたことに戸惑っているようだ。

「どうしてこんなところに？ 不破氏を迎えにでもいらしたんですか？」

上島も同じ質問をしたところだったに違いないが、先に問われて首を横に振った。

「い、いえ。そ、そうでは……。蔵元様は……。あの？」

「私ですか？ 徳治は、私の兄なのですよ」

上島はぼかんとし、それから何かに気づいたようにハッと喘いだ。

「蔵元のご長男様……ま、まさか！」

「上島、落ち着け。言うのを忘れていた。徳治氏は、蔵元家のご長男だ」

「こ、これは……で、では、愛美様は蔵元家の？ ……な、なんと申し上げればよいのか」

「何も言う必要はありませんよ。上島さん、事實は事實。それより、お節は、美味しかったのかな？」

「はい。とっても美味しかったです」

愛美は感謝を込め、お節を手配してくれた三次に頭を下げた。

「ありがとうございます」

「それはよかった。それで上島さん？」

「は、はい」

「貴方は、不破氏を迎えに来たのでなければ……何をしに？ ここに遊びに来たなんてこと……なにせ今日は正月の、それも元日だし……ありそうもないが……」

「そ、それは……」

「上島さんは、ここにしばらく逗留することになった」

徳治の言葉に、三次は眉を寄せた。

「逗留？ なぜ？」

「明日、私らがここを留守にするから、留守番してもらおうのさ」

「留守番？ しばらく逗留するって言いましたよね？」

徳治はくすくす笑い、上島のほうを向いた。

「上島さん、こいつに茶でも入れてやってくれませんか？」

「はい。何がよろしゅうございますか？」
 「なんだ。もう不破氏の入れたお茶は飲めないわけですか？　こんなことなら、もっと飲ませてもらっておけば良かったな」

「ゆ、優誠様が……お、お茶を？」

「上島、私が茶を入れたくらいで驚くな。私にだってそれくらいのことではできるさ。言わせてもらえば、夕食を作る手伝いだってしたんだぞ」

「ああ。正直、役に立ったかは疑問だがな」

徳治から辛口な評価をもらった不破は、愉快そうに笑った。

上島は眩暈めまいでもしたのか、額を押さえた。

「それじゃ、そうだな。コーヒーをいただいてもいいかな？　上島さん」

「は、はい。承りました。いま……すぐに」

上島は額から手を離し、几帳面なお辞儀をすると、少しふらつき気味に部屋を出ていった。

「それで？　父はどんな様子だ？」

さっそく切り出された話に、三次は渋い顔になった。

「不機嫌ですよ」

三次はぶつきら棒に口にした。

「まあ、そうだろうな」

「ですが、……来るのを拒んでいるわけでは……」

「自信がなさそうだな？」

三次はもどかしそうに両手を握り合わせた。

「父の心の中は、誰にもわかりませんよ」

「それはそうだな」

「それで、その……父を、この家に招いてくれませんか？」

「わかった」

徳治はあっさり承諾した。そのことに、三次はいくぶん驚いたようだが、頷くとまた口を開いた。

「断るに違いありませんが、……できれば、繰り返し誘ってもらえたら……」
 「わかった」

ふたりの会話を聞いていて、愛美はひどく気が滅入ってならなかった。

どうしてなのか、蔵元に行くことを考えるだけで、気分が沈んでしまう。

そんな自分が、自分でも嫌なのだが……

明日が来なければいいとまで考え始めている自分が、愛美は理解できなかった。

「愛美さん」

「はい？」
 「明日もその振袖を着ていらっしやるといい。父にも貴方の振袖姿を見せてやって欲しいんです」

愛美は内心弱った。振袖姿の愛美を、祖父が見て喜ぶとは、どうしても思えない。

「なら、私は紋付でゆこうか？」

その言葉に、愛美は父に顔を向けた。

「兄さんは、ステテコでもももひきでもなんでも勝手に着てくればいい」

徳治の冗談に、三次は真顔で返した。

「そうか。おい、愛美？」

「はい」

「買置ききの、新しいステテコはあったかな？」

三次に負けないほど真面目な父の顔を目にして、愛美は派手に吹き出した。

ステテコなんて持っていないくせに……

「お父さんったら……蔵元さん、わたし、自分では着物の帯が結べませんから」

「ああ、それなら林田さんに、明日の朝、来ていただきましょうか？」

不破の言葉に愛美は慌てて手を振った。

「そ、そんなご迷惑、かけたくありません」

「それなら、一之瀬の叔母のところに着付けをしてもらおうといいですよ」

そう言ったのは三次だった。一之瀬の叔母と三次が言うのは、徳三の妹である一之瀬琴子のことだ。愛美にとっては大叔母ということになる。愛美は三次に顔を向けた。

「一之瀬の？」

「ええ。あそこのお手伝いさんは、着物好きな叔母の着付けを手伝っているようですから、振袖の帯でも大丈夫なんじゃないかな。電話で聞いてみましょうか？」

愛美の返事も聞かぬまま、三次は電話に歩み寄り、受話器を持ち上げた。

「三次だけど。……ええ、叔母は近くにいますか？ ……はい、お願いします」

電話に出たらしい大叔母の琴子と話をし、通話を終えた三次は、受話器を戻すと愛美に向かって頷いた。

「大丈夫だそうです。それなら、明日は一緒に蔵元に行こうと言っていましたよ」

「一之瀬の叔母か……ずいぶんひさしぶりだ」

そう言った徳治は、どうしたのか顔をひどく曇らせた。

「明日は、謝罪しなけりやならんな」

「叔母に？」

「ああ。妻を……恵依子を亡くして……葬式に来てくれたのに……私は、もうここには来てくれるなと言った。あの頃、愛美は中学で……蔵元のこととは封印しておきたかった

んだ」

「そうだったんですか」

「だが、叔母は私に隠れて、愛美と会っていた。誕生日に贈り物を渡されたことがあってね。二度とこんな真似はしないでくれと……。いま考えると、ずいぶんと理不尽なことをした……」

「謝罪したければ、明日すればいいことですよ。叔母さんは兄さんを恨んでなんかいませんよ」

「だろうな。父の妹にしては、人柄がいいからな」

「そんな言い方をしたら、僕たちの父親は人でなしみたいに聞こえますよ」

「愛想がいいひとじゃない。愛美、明日はどんな言葉が父の口から飛び出るかかわからんが……年寄りだと思っけて許してやってくれ」

「そ、そんなこと……」

「それは、僕にすれば、兄さんに言いたい言葉だな。こんなに長いこと仲違いなかたがしたままで……いい加減仲直りして欲しいですよ。まったく傍迷惑だ」

「まあ、善処するさ」

「あてにならない言い方だな」

渋い顔で三次は言った。

しばらくして三次が帰り、夕方近くになると、林田がやってきた。

林田は上島を手伝って夕食を作ってくれ、愛美と一緒に脱いだ着物をしまってくれた。不破は、林田が帰るまでの間に、彼女と色々話をしていたようだった。

四人での夕食を終え、食後の飲み物を飲むと、上島は自分の部屋に引き取ってしまった。自分の存在が、なるべく邪魔にならないようにと、上島は遠慮しているように思えた。愛美はそんな上島が気の毒で、一日でも早く、彼の本来の場所である不破の家に戻れるようにと、願わずにはいられなかった。

「徳治さん、お話があるのですが……」

不破は少し緊張した面持ちで、徳治に話しかけた。

「なんだ？ いい話か？」

話し出す前に、そんな風に徳治から尋ねられ、不破は苦笑いを浮かべた。

「徳治さんにとって、いい話とはゆかないかもしれませんが……」

「そうか。まあ、聞くだけは聞いてやろう。話してみろ」

「明日、おふたりは蔵元家に行かれる。その結果、蔵元との縁が復活する可能性が……」

「それはどうかな」

「ですが、復活の第一歩となるのは確かだと思います」